

カルチャー・ショック 外国人のみた日本



Cleo Anne A. Calimbahin
出身地：フィリピン
所属：シニア・レクチャラー, University of Asia and the Pacific
PhD Candidate, University of Wisconsin-Madison
日本滞在：2009年5月～10月

スミマセン、逃げなうでくたわう

クレオ・アン・カリムバヒン

これまで世界各地を訪ねる機会があったのに、私の祖国フィリピンからとても近い日本に行くのになぜこんなに長く時間がかかってしまったのか言葉に窮してしまふ。日本人の友達は私が日本に来たことがあると思っていたらしく、これが初めてだときくと一様に驚きの表情を浮かべた。旅行ガイド、歴史、人類学の本を読み、日本滞在経験のある友達や海外で出会った日本の友達から得た知識をつめこんだ。様々な国々を訪れて様々な経験をするには抵抗がなかった。訪れた多くの場所を自分の故郷だと呼べるようになったのは幸せなことだとおもう。

しかし、日本滞在にはまったく準備ができていなかった。最初の数日間にはあらゆる感覚への容赦のない攻撃に晒された。目が回り、混乱する一方でこの国のことをもっと知りたいという気持ちで一杯になった。外国人は日本は不可解だよく言う。日本語を話さず、読めないガイジンにとっては特にそうだ。言葉の壁がある人たちが当惑するのは納得できる。例えば、このスイッチは電源を入れるためか切るためか。このメールは男性からか女性からか。どれが洗濯用の洗剤なのかを理解するのに二〇分もかかった。それに

「グリーン・ペプシ」って何？

来日して数日は電話がなくても受話器をとることができなかつた。「もしもし」ときてそのあと早口で日本語でまくし立てら

れるのが怖いからだ。電車のなかで高齢の女性に席を譲るときは、先方に「ありがとう」と言われ座っていたことを期待する。でも、たいていはお断りと思われる早口の日本語が返される。二人ともたつたままの状態となる。また席をどうぞという仕草をする。また断られる。再度どうぞと態度で示す。ついに笑顔を見せ、彼女は席に座る。何もかも初めてのことだらけのなか、気持ちが安らぐのは笑顔を見せられたときだ。それは世界中の善良な人たちが見せるあの笑顔である。笑顔を見ると前に住んだことのある国々に戻った様な気がする。このことで日本は異国ではなく親しい国となった。

ある事務所で、所定の用紙に記載することを求められた。説明書きはすべて日本語。受付の女性は、私が読み書き、会話ができないことに気づき、どうすればよいのかを一所懸命説明しようとしてくれた。しかしうまく説明できないイライラが高じ、突然奥の部屋に入ってしまった。私は、彼女が和英辞典を探してくれていることを期待した。しかしいぶん長い間出てこないのだから「スミマセン、逃げないでください！」と叫んだ。言葉が通じなくても、手振り身振りでなんとかわかりあえることを伝えたかったのだ。

外国人が感ずる「謎」はおそらく日本の一見矛盾するようにみえる複数の側面に起因しているのだろう。伝統の尊重と新技術

への飽くなき探求心。日本はサンリオのふるさとであると同時にサムライの遺産も持っている。また、効率性を重視する秩序がある一方、親切なおもいやりと暖かいおもてなしのころがある。福島県を訪れたとき人々の暖かいおもてなし、笑みを絶やさずにお互いに雑談してくつろぎたいという人々のこころに触れた。私は深い感銘を受けた。

駅や電車で様々な人々を見かける機会があり、そのたびに様々な発見もした。原宿駅のホームで着物を着た女性がいかにも原宿風を装った若者と連れだっているのを見てびびくりした。ラッシュアワー時の電車では平気で押したり当たってきたりするダークスーツ姿のサラリーマンがいるかと思えば、小さな娘と歩調を合わせ仲良く手をつないでおしゃべりながら学校に送り届けようとするこれまたダークスーツ姿のサラリーマンも見かけた。初出勤日、何よりも驚いたのは働く女性の姿があまりみられなかつたことだ。「女性はどこにいらっしゃるの？」「女性専用バスというのがあるのかな？」という疑問すら生じた。

このように私は、徐々に日本を発見している気がする。言葉が知らなくては日本の文化や社会の複雑性を十分にはわかり得ないだろうが、垣間見ることはうれしい。ちなみに、私は「しそペプシ」(「グリーン・ペプシ」)が大好きだ。

(海外客員研究員／訳 真田孝之)